

19世紀後期の五大湖沿岸地域における地域形成に関する一考察

A Study on the Formation of Local Society in the Great Lakes Coastal Area in the Late 19th Century

原田 洋一郎¹⁾

Yoichiro Harada¹⁾

要旨：本稿では、19世紀後期の五大湖沿岸地域においてどのように新たな地域が形成されたかについて、アメリカ合衆国ミシガン州北部の銅鉱業地域の形成に関わった人びとの証言に注目して検討した。銅鉱山開発の初期には、ヨーロッパにおける鉱業の先進地域であった英国コーンウォール地方の出身者、ドイツ人などが多数を占めていたが、鉱山開発の本格化とともに、鉱山集落や湖岸の港町に商業、運輸など他の産業に従事する者も多く集まるようになり、居住者の出身地も属性も多様となった。新たな都市的集落には、さまざまな宗派の教会が建築され、禁酒協会が組織されるなど、精神文化の側面でも早い段階から充実が目指されていた。五大湖水運や陸上交通路の整備によって地域の利便性とさらなる可能性が拡大した。そして南北戦争は、鉱物資源の需要を刺激し、鉱山の活性化に寄与することになった一方で、深刻な労働力不足を招いた。このことは、北ヨーロッパ地域から新たな移住者を迎える契機となり、住民構成はさらに多様化した。

キーワード：19世紀後期、五大湖沿岸、銅鉱業、地域形成

1. はじめに

本稿では、19世紀後期の五大湖沿岸地域においてどのように新たな地域が形成されたかについて、具体的な事実に基づいて検討することを目的とする。

19世紀半ばを過ぎた頃のアメリカ合衆国は、その世紀の前半までに獲得した領土を隈なく開発し、居住地を拡大する途上にあった。合衆国の北辺の地にあたる五大湖沿岸地域は、数少ない材木業者やカトリックの宣教師などが早くから入り込んでいたが、森林に囲まれた寒冷な自然環境に加え、ネイティブアメリカンやフランスとイギリス、さらに合衆国独立後にはイギリスと合衆国との間に土地の占有と支配をめぐる戦闘がしばしばおこなわれたことなどから、安定した居住地となり得ず、長らく人口希薄な場所であった。

ところが、19世紀半ばに、アッパー半島(ミシガン州北部)の銅鉱石、鉄鉱石の将来性が確認されると、合衆国東部のみならずヨーロッパからの移住者が押し寄せるようになり、この地に新たな居住空間の創出が始まった。川崎茂は、合衆国西部やオーストラリア、ニュージーランドにおける金鉱山開発に伴う人びとの居住空間の拡大を「鉱山業フロンティア」と捉え、その展開について検討したが^[1]、ほぼ同時期の合衆国北東部においても同様の現象がみられたのである。筆者はかつて、ミシガン州北部の銅鉱業地域の形成過程について概観し、主な開発の対象が金ほどの希少性を持たない銅であったこの地の鉱山業においては、生産や輸

送のコストの厳格な管理が求められ、ときに道路や水路の改修などの大規模な土木工事が必要であったことなどから、合衆国東部の大資本の影響がより大きかったことを確認することができた^[2]。そして、異なった文化を内包したコミュニティがどのように形成され、維持されたのか、ということに焦点をあてるのが、さらなる課題のひとつにあげられた。

本稿では、この点について少しでも明らかにするべく、アーサー・W・ターナーの著作^[3]に記載された当時の人びとの記録や証言を主な題材として、どのような属性の人びとがどこからやってきたか、どのようにコミュニティの建設に関与したか、といったことに注目して検討を進めることにする。

ミシガン州北部のホートン郡(1846年に郡制施行)、オントナゴン郡(1855年)、キウィノー郡(1861年)、バラガ郡(1875年)は、銅鉱業の隆盛によって、後に「カッパーカントリー」とよばれた地域である。この地域の鉱山業が最盛期を迎えたのは、19世紀末～20世紀初頭にかけてであったが、ここでは、この地域の特性がまさに形成されつつあった、1850～60年代にとくに注目することにする。この時期には、鉱山の繁栄にもなって、他地域から多くの人びとが流入し、半島内の各地に次々と新たなコミュニティが成立し、交通路の改変が積極的におこなわれた。また、この時期には、アメリカ合衆国の歴史におけるきわめて重要なできごとであった南北戦争が勃発している。本稿では、この地域の人びとがどのようにこの内戦を捉えたか、地域に

1)東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科、一般科目

どのような影響があったのか、についても考えてみたい。

2. 銅鉱山開発初期の鉱山集落と港町

1) クリフ鉱山とイーグルリバー

キウイノー半島におけるもっとも初期の白人集落は、スペリオール湖岸の港町であった。半島北部のカッパーハーバー、イーグルハーバー、イーグルリバー、そして南部のオントナゴンなどは古くから知られていた。銅鉱山開発が盛んになると、内陸部の鉱床の所在地に鉱山集落が成立し、多くの人口が集まるとともに、その近隣の港町の人口も増加した。

ミシガン州北部のアップパー半島東端、スペリオール湖とヒューロン湖をつなぐ場所に位置し、フランス領であった17世紀後期にはすでに交通の要衝として知られていたスーセントマリーは、鉱物の探索のために多くの人びとが半島西側に集まるようになると、雑草が生えた街路、腐って朽ちた埠頭や倉庫の目立つ、ぱっとしない寒村となってしまうとされる^[4]。地区によっては、ネイティブアメリカンとフランス系の者ばかりとなり、アングロサクソン系の住民がほとんど見られなくなったともいわれる。

クリフ鉱山の精銅の生産は、1857年に236万3,860ポンドに達した。この年のボストン市場におけるクリフ鉱山株の価格は175ドルだったが、1858年には300ドルに上昇した^[5]。操業が開始された1848年から休山の1870年までの間に、必要経費を支払った上で、クリフ鉱山が株主に配当した額は262万7000ドル、これは投入された資本の20倍に達する額であったという。

クリフ鉱山の鉱山集落、クリフトンには、1860年代に

は1,400人以上の居住者があった。「クリフ(絶壁)」の名が示すとおり、この集落は崖の下に寄り添うように立地していた。集落には広大な耕作地があり、エン麦、ジャガイモ、カブ、マメやその他の野菜が栽培されていた。鉱山会社の購買施設、クリフマイン・ストアでは、安価な塩漬け肉が大量に販売されていたが、1860年頃には、集落の居住者は、新鮮な魚、ハト、ベリー、ナッツ類の食事をとることができた。

1850年からこの鉱山でエンジニアとして働いていたジョセフ・ローリングスは、この集落にやってきた当時には、塩漬けの牛肉、虫のついたマメ、まずいパン、そしてときおり出されたわずかな米といった食事が供されていたことを記憶していた^[6]。約10年の間に食糧事情は大きく改善された。ローリングスがやってきた当時、クリフトンの人口は500人ほどで、住民の多くはコーンウォール人、アイルランド人、フランス系カナダ人であった。これらの出自の者は、その後も多数派であった。ローリングスは、「クリフで得た銀で多くの良い農場を買った」という話を聞いたことがあった。クリフではしばしば銅とともに自然銀が見つかったが、そのような際にけっこうな分け前を自分たちのものにしていただという。粗末な粉碎機を備えたクリフ鉱山の選鉱場で雇用された少年たちも、粉碎機から銀を着服していたといわれる。クリフ鉱山の銅と銀は、さらに、銅の精錬と加工のために運ばれたペンシルベニア州ピッツバーグにおいても少年たちに就業の機会を与えていた^[7]。

アップパー半島最古の聖公会の建築物、グレイス聖公会教会は、クリフ鉱山で係長を務め、後にパーク・デイビス&カンパニーの創設者となった、ハーベイ・パークの

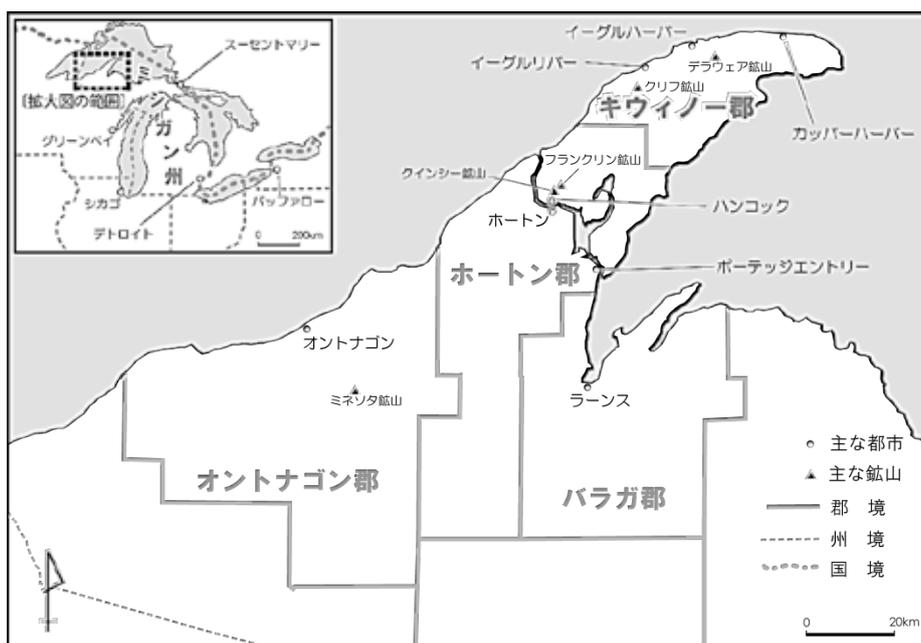


図1 研究対象地域

尽力によって1959年に建設された。クリフトンでは、メソジストも活発に活動し、禁酒運動にも影響を与えた。

当時21歳であったヘンリー・ホバートは、1863年頃に5歳から20歳までの224人の生徒を教えるべくヴァーモント州からクリフトンへやってきた。彼の目には、子供の両親たちは「我が子の教育にきわめて無関心である」ように映った^[8]。彼らは、現金を溜め込もうとする一方で飲酒で浪費した。ホバートはまた、「コーンウォール人は粗野で下劣で乱暴であり、ドイツ人はちょっとましなだけで、短気なアイルランド人は、男も女も、休みの日の喧嘩に加わって、髪の毛を引っ張ったり、悪口をたたいたり、蹴っ飛ばしたりしたいとしきりに求めているだけだ」と思っていた。後に、ホバートは酒場で暴れたアイルランド人たちが20ドルの罰金を課されたことを聞いて喜びつつも、「それも悪くはないが、どうせなら近所の酒場が焼け落ちてしまえばもっとよかったのに」と思った。坑夫たちがジンとビールが必需品であると考えていることが、彼にはまるで理解できなかった。

1852年には約100人の居住者があったイーグルリバーは、内陸のクリフ鉱山、ノースアメリカン鉱山、スペリオル湖銅鉱山、ガーデンシティ鉱山の景況に依存する集落であった。何軒かのログハウスが、居酒屋と隣り合っ建てていた。1861年、キウィノー郡が、ホートン郡から分離して成立したとき、イーグルリバーは郡政府の所在地となり、翌1862年には、その人口は300人近くになった。クリフ鉱山から3マイル離れたこの集落には、五大湖の諸都市からの船が、郵便物、日用品、そして乗客を載せて寄港した。当時、ここには1軒のビール醸造所、3軒の酒場、数軒の鍛冶屋、1軒の材木商、数軒の下宿屋があった。負傷した坑夫を治療する医師、法律家、保険代理店、そして3名の治安判事もいた^[9]。

ジョセフ・オーストリアンは、バイエルン王国（現ドイツ・バイエルン州など）のディンケルスビュールで生まれ、毛皮交易と雑貨店を営んだ兄のジュリアスを頼って、17歳の時に合衆国へやってきた。19歳のとき、ジョセフは、イーグルリバーのヘンリー・レオポルドの店で事務員・簿記係として働くようになった。レオポルドの妻アイダはジョセフの姉であり、ジョセフは彼らの家に寄宿していた^[10]。レオポルドの店では、小麦粉、コーヒー、肉類、金物類、衣服を販売していた。ジョセフは、クリフ鉱山をはじめとする近隣の鉱山、下宿屋や坑夫の家へ毎日出かけて行って、注文を取ったり、未収金を回収したりした。もうひとりの義兄、サミュエル・F・レオポルドは、衣服、小間物類、ブーツ、靴、そして男性用服飾品を仕入れるために、ニューヨーク市へ行き来していた。ヘンリーは英語の読み書きができなかったため、商業文や勘定書きのすべては、ジョセフ・オーストリアンが取り扱った。

2) ミネソタ鉱山とオントナゴン

鉱物資源地域の南端にあつて、かつて古代の坑夫たちによって採鉱されたオントナゴン川の河口から14マイルの場所に位置していたミネソタ鉱山は、オントナゴン地区を、活気ある中心地へと変貌させた。そこには合衆国中から集まってきた多彩な人びとが満ちあふれていた。森林浴のためにやってきた肺病持ちのニューヨーク人、企業家、相場師、よそ者を案内するネイティブアメリカン、農民、伝道者、商人、そしてパブリックスクールの少女たちにフランス語や刺繍を教えた西インド諸島出身の若い女性もいた^[11]。

1850年から1860年にかけて、オントナゴンは、スペリオル湖沿岸でもっとも大きく、もっとも繁栄した町となっていた。1860年までに4軒の製材所では、年間185万フィートの材木が生産され、丸太小屋は木造家屋にとって代わられた。鉱山、粉碎所などでは、1,419人が働き、毎年ほぼ100万ドルに相当する製品を生産した。オントナゴンの船渠から、周辺地域から集まった銅が、デトロイト、クリーブランド、大西洋岸をめざして船送された。1862年までに、クリーブランド、デトロイト、そしてシカゴからの汽船は、それぞれの航行ごとにここに寄港するようになった。デトロイトからの運賃は14ドルで、16ドルのチケットを買うと、シカゴから100マイル離れた各都市へ船で行くことができた^[12]。

ミネソタ鉱山のほかにも、1862年までにオントナゴン地域には、ナショナル鉱山、ロックランド鉱山、エバークリーン・ブラフ鉱山、ボヘミアン鉱山といった主要な銅鉱山が開坑しており、アメリカ人のみでなく、アイルランド人、ドイツ人、コーンウォール人、イングランド人、そしてフランス系カナダ人の入植者たちがここで働いていた^[13]。

オントナゴンでは、船渠、倉庫、そして船が川沿いに並び、商店、酒場、下宿屋が、主要道に面して立ち並んでいた。1862年までに、壮大なビゲローハウスは、富裕なピッツバーグの実業家、ジェイソン・ハンナ、船の繋留や倉庫に関する事業の共同経営者であったジェームズ・クローズ、州の上院議員になったジェームズ・マーサー、町にあった6軒の商店のうちの一つを経営したウィリアム・コンドン、下院議員から、その後ホートンの著名な市民になった法律家のジェイ・ハッベルのような人びとへのケータリングをおこなった。ミシガン州中でもっとも快適なホテルの一つと評価されたビゲローのほかにも、ジェームズ・ラフズ・エクステンジホテルやロスロップ・ジョンソンズ・ジョンソンハウスといった宿泊施設があった。1860年代にはすでに、オントナゴンの夏は、州南部や五大湖地域からの旅行者たちを引きつけていた。彼らは「美しい景色や健康的な立地」を満喫しにやって来た。ポーキュパイン山地のカーブ湖(現

在の“雲の湖”)を訪れる者もあったが、そこにはまだ探鉱者たちが徘徊していた^[14]。

4月下旬から10月下旬、汽船が週に2回から5回、郵便物を運んだ。酒場や製錬所があったオントナゴンには、暴動、喧嘩、不摂生もあったけれども、弁護士、歯科医、そして、おしなべて遵法的な市民があった。サミュエル・S・ウォルバンク博士は、1862年、内科医、薬剤師、そして書店を開業した。シュナイダー夫人とルイス・ウェバーは、パン屋を経営した。1軒のビール醸造所と2軒のなめし革工場が繁栄していた。オントナゴン鉱業地域協会は、週1回の集会を行っていた。これは、後の商工会議所へと発展した^[15]。

メンバーのほとんどがドイツ人であった音楽愛好協会が1850年までに設立され、メソジスト礼拝堂、監督派や長老派の教会、そして聖パトリックのカトリック教会によって育まれてきた文化に洗練を加えた。オド・フェローズ、フリーメイソン、そしてグッド・テンプラーズなどの結社も盛んに活動していた。バプテストやバイブル・クリスチャンズも教会を建てた。ミネソタ鉱山では、1856年8月17日に、カトリック教会の司教、フレデリック・バラガ^[16]によって、聖メアリ教会が献納された。この教会は監督管内でもっとも大きいものだったが、それでも収容できたのは会衆の3分の2のみであり、多くの人びとは3つのドアのところに立ってミサに参加しなければならなかった。バラガ司教は、2年後にミネソタ鉱山を訪問した際、プロイセン人のマーティン・フォックス牧師が教会を建てるために働いていたのに遭遇した。フォックスは、ドイツ語、英語、そしてフランス語を巧みに操っていた^[17]。

ダニエル・ピットマン将軍は、この地域の鉱山業に大きく貢献した地質学者、ダグラス・ホートンの名にちなんだ鉱山の経営管理のために、1851年にデトロイトからオントナゴンにきた。彼は、1854年の聖公会昇天教会の創立に影響力のあった人物だった。オントナゴン牧師館は、ピットマン将軍の住居であった建物がその隣の区画とともに寄付されたものであった。英国南部のブライトン近郊で生まれたジェームズ・バーテンショウは、商業に従事していたアウグストゥス・コバーンを伴い、1851年の春にオントナゴンにきた。1855年、デトロイトの建築家によって進められた教会建設の事業は完了した。窓枠がオントナゴンで製造されたのを除いて、すべての材料はデトロイトから船で運ばれた。オハイオ州のサラ・ボードマン夫人は、洗礼盤を寄付した。コネチカット州のコーネリア・ボードマンは、赤い表紙カバーのオックスフォードの聖書と祈祷書を寄付した。これらの女性はいずれもバーテンショウ夫人の親戚の者だった。このように、労働者、商人、そして鉱山管理者たちといった集落の居住者ばかりでなく、関係諸地域の者によって、奉仕、人

材、財産が持ち寄られ、結びつけられて、伝統ある様式の教会が建築され、維持されていた^[18]。

3. ポーテッジ湖周辺の鉱山集落と港町

1) クインシー鉱山の繁栄

オントナゴンの60マイル北東に、巨大なペワビック杏仁状岩鉱床が、1850年代半ばに発見された。鉱床の一部は50年代初めからすでに採掘されていたが、探鉱者であり坑夫でもあったウィリアム・フルーとその一団が、ネイティブアメリカンによってかつて採掘された堅穴を調査していたとき、富鉱帯が偶然発見されたのであった。この鉱床の規模はきわめて大きいことがわかったが、そこに含まれる銅の品位は2~4%、しかもそれらは地層中に細かくばらまかれていた。これはクウィノー半島の中央を南北に延びる富鉱帯の北と南の端で産出された自然銅とはまったく異なる低品位なものがあった。地質学者や企業家の多くは、ポーテッジ湖岸の杏仁状岩は決して採算がとれるものではないと考えていた^[19]。

クインシー鉱山は、ミシガン州のデトロイトやマーシャルの投資家たちによって1846年に設立された。4万2,000ドルの資本をつぎ込みながら、一時は操業を停止するところまで追い込まれていたが、1860年代になって状況が改善し、1868年には投資家たちへの配当が計上されるようになった。クインシーの成功は、ハンコックをはじめ、多くの都市や村を誕生させた。

ポーテッジ湖の鉱山と粉碎施設の成功の一部は、そこに投資し、改良を施し、見事に管理した東部出身の人びとに負うものであった。彼らの多くは、それ以前には、まったく別の仕事に携わっていた。サミュエル・S・ロビンソンはその典型例であった。彼は1853年にニューハンプシャー州から西へ向かい、学校の教師、石工、橋梁建築者として働いた。彼は、1860年代の前半にクインシー鉱山の管理に携わるようになる前に、現在のゴゲビック郡での経験を通して鉱業について学んだ。後に彼は、コロラド州ネヴァダやニューメキシコ州で銀鉱山を営み、シカゴやインディアナ州、ミズーリ州で橋を建設した^[20]。

「クウィノーはすばらしい土地だ。」1863年の後半、ロビンソンはニューハンプシャーのJ・P・ブリューワーに声高に語った。「しっかりして抜け目のない、エネルギーでよく働くヤンキー（ニューイングランドの若者）が半ダースかもうちょっと必要だ。僕は、そんな若い男たちに、年に500~600ドルに値する場所を与えてやる。それで、もし彼らに適切な素質があったら、絶えず成長を続けることができるだろう。ただし、彼らはあまり好みがかましくてはいけなく、ハードワークを嫌がるようでもいけない。」彼は、こうした若者を職

工長として養成しようと考え、当時は15人ほどを600～1,200ドルの給与で雇っていた。ロビンソン自身は、毎年3,000ドル以上を受け取っていた。彼は、妻のエリザと、家賃を支払う必要のない家に住み、燃料、何頭かの牛や馬、さらに使用人さえ提供されていた。とはいえ、発破のための火薬を買い入れに州南部へ行き、ときにシカゴやカナダへも出張するなど、彼の仕事はすべて骨の折れるものであった。

冬が来る前に必要な備えについて彼の見積もりからは、1865～66年のクインシー鉱山での生活の一端をうかがうことができる。2,400バレルの小麦粉、200バレルの豚肉、350バレルの牛肉、50バレルのニシン、500バレルのタバコ、1万ポンドのラード、1万2,000ポンドの乾燥リンゴ、4万8,000ポンドのバター、6万5,000ポンドの砂糖、4万5,000ポンドの茶、6,000ポンドのコーヒー、2,500ポンドの米、そして、1万2,000ポンドのせっけんを彼は必要とした。1万ケッグの粉、30万フィートの導火線、6万ポンドの獣脂、地下で坑夫がヘルメットにつける800ポンドの蝋燭が、クインシー鉱山で必要とされた。また、彼には120の斧、75トンの石炭、そして、靴墨、青味付け、針、洗濯ばさみ、ふくらし粉、コンデンスミルク、かぎたばこも必要だった。それらのすべては船で送られた。地元の農家が生産したものを購入することができたので、野菜類の移入は必要とされなかった。鉱山会社も自ら1,000ブッシェルのジャガイモを栽培した。地元産の牛は屠殺された後、塩漬けにされた。前年度の坑夫たちの健康は、きわめて良好であった。労働者のうちには、新たな社屋の下に食料貯蔵用の立派な地下室をこしらえるのを手伝う者もあった。クインシーは丘陵の下に自らの船着き場を所有していた。干し草や穀物は、必要となるまでそこで保管された。また、鉱山会社は購買部を運営していたが、ハンコックに多くの商店が開店するようになったこともあり、1866年9月1日にはこれを閉店した^[21]。

若い労働者たちは下宿屋に住んだ。几帳面で気むずかしい何人かは、鉱山の役員宅に住み込ませた。会社は、高報酬を求めてどこかへ去ってしまうかもしれない貴重な人材を引き留めておくために、1866年以前に家屋を建築した。クインシーの家屋に住みながら、「友達といっしょにいるために」他の鉱山で働く坑夫もいた。ロビンソン自身の家屋は決して豪勢なものではなかった。彼は、「屋根をたたいては通り抜けて家中に落ちてくる水」を受け止めるために鍋や釜を置くために一晩中起きていた幾夜かのことを思い出した。1862年以来、男たちは一日に10時間働き、平均月収は41.50ドルであった。ロビンソンは、この鉱山の賃金はこの地区で支払われているものに比べて低い、という自らの考えを、オントナゴン郡のミネソタ鉱山の支配人へ書き送った。労働者のうちに

は請負で働く者もあった。岩を破碎する、あるいは鉱車をいっぱいにする仕事に従事した男たちは、30～35ドルを稼いだ。ロビンソンは、ミネソタ州ホワイトウォーターフォールズで、ある男にクインシーに来るように誘った。彼は月に50ドルで良い石工を雇うことができたからであった^[22]。

2) ハンコックとホートン

クインシーそのほかの鉱山の隆盛は、ポーテッジ湖周辺に多くの町や村を誕生させた。ハンコックは、クインシー鉱山会社の支配人であったサミュエル・W・ヒルによって、ポーテッジ湖に臨む、ヘムロック(カナダツガ)の原生林に覆われた斜面上の、極端に起伏のある場所に町建てされた。ヒルによって描かれた1859年の図面によれば、当時の町は、現在のリザーベーション・ストリートとモンテズマ・ストリートの間にはほぼ限られており、東から順にリザーベーション・ストリート、テスクコ・ストリート、ラヴィーン・ストリートが南北に配置され、それに直行して、ウォーター・ストリート、ハンコック・ストリート、クインシー・ストリート、フランクリン・ストリートが東西に配置されていた(図2)^[23]。リザーベーション・ストリートのすぐ東側はクインシー鉱山の保留地であり、街路名はこれに因むものであった。ヒルの図面や、19世紀末のハンコックを描いたオレオグラフやリトグラフには、リザーベーション・ストリートに並行して軌道が描かれている。これは、クインシー鉱山で採掘された鉱石を、ポーテッジ湖岸に設置されたクインシー鉱山の粉碎施設へ向けて鉱車に載せて運ぶためのものであった。この場所は、丘陵上の鉱山とポーテッジ湖を結ぶ要地であったといえる。ハンコックは、この限られた場所から、北はもちろん、東西に拡大して、この地区の重要な都市へと成長することになる。



図2 ハンコック中心市街の街路配置(1860年代)

注) 街路の形状は現況のものである。

ランサム・シェルデンとコロンバス・C・ダグラスは、エネルギーな開拓者であり、ポーテッジ湖周辺の共同体の創設者としての役割を果たした。ダグラスは、ポーテッジ湖北岸の急傾斜の丘の途中、初期の試掘権が設定された場所にあった丸太小屋に住んでいたが、1851～1858年に断続的に、支配人としてクインシー鉱山会社に勤めた。彼とシェルデンは、1847年の春にはポーテッジエントリーで商店を営んでいた。シェルデンは、ダグラスの妹、テレサと8年前に結婚していた。1851年にシェルデンが、ダグラスとともにクインシー鉱山の運営に加わったとき、彼らの店もクインシー鉱山の場所へ移転した。シェルデンは漁業や狩猟をして家族と生活しながら試掘をおこなっていたが、その暮らしは貧しいものであった。彼は、ピルグリムリバーやポーテッジエントリーのネイティブアメリカンの大きな集落を訪ねて、物資と獲物を交換して資産を増やした。1854年の自筆証書によれば、彼は4人の男を雇って、鉱山の堅坑に下らせ、坑内の支柱を立てさせたこと、彼らに一足20ドルを支払い、その業績に1,400ドルを費やしたことがわかる。1865年までに、ホートン郡の銅生産は、キウィノー、オントナゴン両郡の生産の合計を10トン上回るなど、ポーテッジ湖岸の鉱業は繁栄に向かった^[24]。

ハンコックの立地したところは、かつて、コロンバス・C・ダグラスが所有した土地で、クインシー鉱山へ売却されたものであった。行政体としてハンコックが村制を施行したのは、1863年のことであったが、その5年前、レオポルド兄弟とジョセフ・オーストリアンは、ここに25フィート×150フィート、石造の基礎と地下室を伴った2階建ての商店を開いた。イーグルリバーで成功を収めていた彼らは、クインシー粉砕所の近く、現在のリザベーション・ストリートとウォーター・ストリートの交差点に新たな商店を開くに足る資本を蓄えていた。

オーストリアンは、1860年頃のハンコックは「ほとんど森」であったと記憶していた。1862年までに、ハンコックの人口は1,700人になり、3軒のホテル、6軒の酒場、3軒の雑貨店、3軒の食料雑貨店、金物屋と馬具製造店が1軒ずつあった。加えて、何人かの医師、法律家、保険代理店、宝石店もあった。また、メソジストが自らの資力で1860年に開設した教会。1861年開設の会衆派の教会、1862年開設のカトリックの教会、1866年開設のルター派教会があった。ハンコック郡区には、なめし革工場、灰置き場、校舎、4棟の粉砕施設、そして製錬所があったが、ほとんどの土地は無人の荒野で、かなりの部分が沼地で占められていた^[25]。

ポーテッジ湖をはさんでハンコックと向かい合うホートンも、クインシーやそのほかの鉱山の繁栄により成長した町のひとつであった。1852年、シェルデンとダグラスは、今、ホートンが立地している土地を購入し、現在

のアイル・ロイヤル・ストリートを下った場所に、シェルデンズ・ストアとして知られた、その地で最初の建築物を建てた^[26]。1853年に組織されたヒューロン鉱山などの鉱山会社が開いた試掘地があり、対岸の鉱山から湖を越えて坑夫とその家族が集まってきたことは、ホートンの創設を助けた。ヒューロン鉱山のベンジャミン・ライトは述べている。「労働者たちはあらゆる汽船でホートンへ押し寄せてくる。不思議なのは、夜、彼らが疲れた身体を休める場所をどこに見つけるか、だ。すべての家は人間であふれている。」^[27]

ホートンは、1861年11月1日、人口854人の行政体として編成された。12月には選挙が実施され、185人の市民が投票し、ウィリアム・レイニーが村長に、ジョン・アトウッドが書記に、ウィリアム・ハリスが収入役として選出された^[28]。

バラガ司教とそのアシスタント、エドワード・ジャッカー師は、ラーンスからホートンを訪れて、ポーテッジ湖伝導団本部で伝導をおこなった。司教は、英語、フランス語、ドイツ語を用いて、ホートンに聖イグナチウス・ロヨラ教会を建設するために、きわめて速やかに130ドルを集め、1859年7月31日には献堂式を主宰した。デニス・オニール神父は、聖イグナチウス教会の最初の司祭を勤めた。1854年までに、メソジストはホートンのモンテズマ・アベニューで教団を設立した。トリニティ監督派教会は、当初ハンコックに建築されたが、その後渡し船で湖を横切って、1861年、現在のモンテズマ・アベニューとペワビック・ストリートの場所へ移動した^[29]。

1860年代、ジョン・H・フォスターには、ハンコックとホートンは「古代の森林に半分隠れた粗野な鉱山キャンプ」と映っていた。当時のポーテッジ湖岸地域には、日曜も含めて、昼夜を問わず営業していた酒場、飲酒、神への冒瀆、喧嘩があり、すべてのイングランド人を永遠の敵とし、コーンウォール人を嫌うアイルランド人が居て、法務官は数が少なく力も無く、「人間の性質を獣のようにし無法化しようとするすべての悪質な情熱があふれていた、紛れもない地獄」のようにフォスターには思われた^[30]。

ホートンは、1862年には、2,000人近くの人口を擁し、アッパー半島でもっとも大きく、もっとも重要な村といわれた。将来の見通しはこれまでよりさらによい、と後援者たちは主張した。18,000ドルをかけた郡庁舎と牢獄の建築、新しいホテルとさらなる教会の設立、学校体系を改善する計画があった。温暖な夏季に「健康と楽しみを求める旅行者」が多くあったことは、ダグラス・ハウスの来客名簿から明らかである。ダグラス・ハウスは、フレーム構造の3階建てのホテルで、1861年に竣工した。J・W・バン・アンデン夫人は、1863～64年に、「アッパー半島でもっともすぐれたホテル」と『ミシガン・ステ

イト・ガゼッタ』に記載された宿泊所を経営していた。これらの広々としたホテルのほかにも、ホートンには、フランシス・メイワームの経営したレイク・スペリオル・ハウス、キャスパー・シュルテ所有のペニンシュラ・ハウスがあった^[31]。

多くの小さな下宿屋や商店に加えて、4軒の雑貨店(それらのうちにはコロンバス・ダグラスのものやランサム・シェルデンとその息子キャロルが所有したものが含まれる)、5軒の酒場、仕立屋、4軒の大工店、1軒の製材所、1軒のスズ製品製造所、そして搗鉱用、水洗選鉱用の粉碎所が2軒あった^[32]。ハース・ブルワリーは、1859年に始まり、年に500バレルのビールを製造した。女性たちはさまざまな教会共同体を形成した。サミュエル・ロビンソンは、ホートン郡に法律家がいなかったことを嘆いていたが、ジェイ・ハッベルが、ホートンに弁護士事務所を開いた。1865年までに、ファースト・ナショナル銀行が、16万ドルの資本金で組織された。ランサム・シェルデンは、最初の頭取として、出納係ジョン・チャッセルとともに働いた。週刊の新聞、ポーテッジレイク・マイニング・ガゼッタは、1859年6月に創刊され、その世紀の終わりまでに日刊になった。この新聞社は、1858年にオントナゴンで設立されていたデイリー・マイニング・ガゼッタ社を買収し、移転したものであった。

石灰を焼く竈の仕事に携わっていたM・バン・オーデンは、より有利な石炭事業に関わるようになった。ジェームズ・R・ディーは、クインシー鉱山会社やホートンの後援者たちによる助成金を受けつつ、ウェスタン・ユニオン社を経営した。R・R・ゴッデルは、地元の運輸交通の改善に不可欠な、セントマリー船舶運河・ミネラル・ランド会社の代表となった。土木技師のジェームズ・エドワーズは、ハンコックとホートンを結ぶ鉄橋の建設に貢献した。ホートンの主要道には、ランサム・シェルデンの名が付けられた^[33]。

ポーテッジ湖岸の町のエネルギー的なアメリカ人たちは、ブルジョワの文化を導入した。彼らは、講義の聴講を予約し、本を読んだが、出身地のニューイングランド、オハイオ州、ニューヨーク州などでおこなわれていたような、厳格な形式的行為やエチケットのいくつかは捨て去られた。少数の家族たちは、小さくて粗末な家屋で「兄弟のように」集った。女たちは、絹やレースの衣服を着るのを止め、モスリンや更紗のガウンを着て夜会に現れた。男たちは、モカシン^[34]、赤い飾り帯、赤や青のフランネル製の流れるようなシャツの袖で壮観に装って、「目の肥えた女たちに品評される」前に、スクエア・ダンスやホーンパイプの舞曲に加わった。フォスターは、ハンコックやホートンから数マイル離れた地から、吹雪

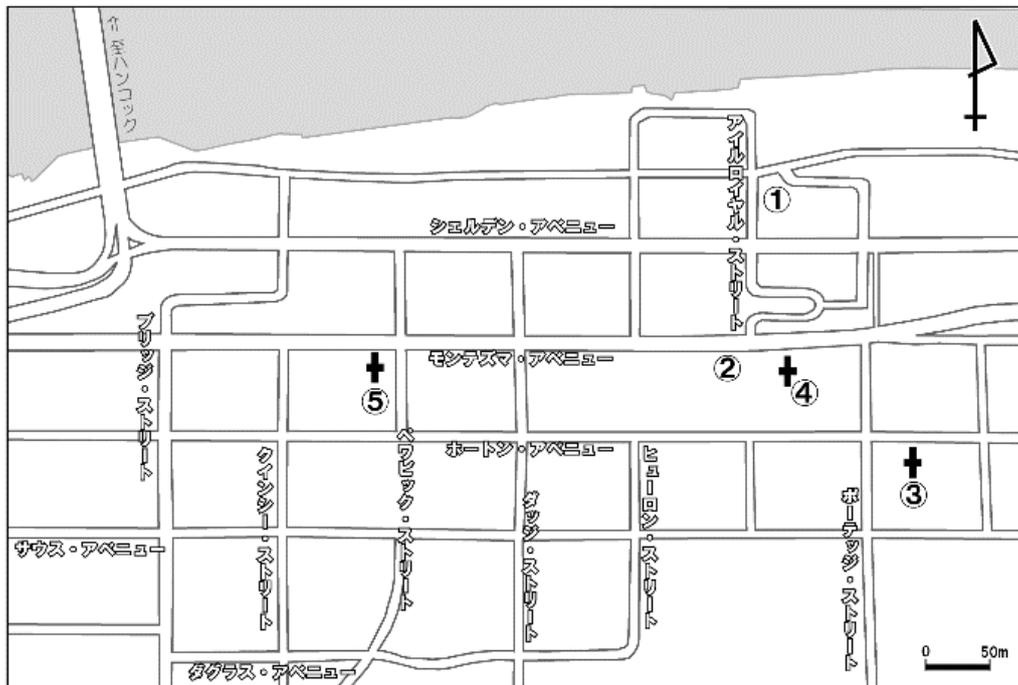


図3 ホートン中心市街

- ①デイリー・マイニング・ガゼッタ ②ダグラス・ハウス(創建当時の位置)
- ③聖イグナチウス・ロヨラ教会 ④グレース・ユナイテッド・メソジスト教会
- ⑤トリニティ 監督派教会

注) 街路の形状は現況のものである。

や厳しい寒さを切り抜けて来た人びととともに「長く、暗く、退屈なこの北の地の冬の夕方、ダンスをしたりカードゲームをしたりするのは唯一の気晴らしだった」ことを思い出した^[35]。

4. 交通路の改善

情報伝達と輸送の困難さや所要時間の長さは、この地域の居住者や事業者を悩ませていた。サミュエル・ロビンソンは、1863年11月8日、南のロウアー半島とウィスコンシン州へ船で向かったが、帰路は「森林の中の約130マイルの陸上ルートを一日約30マイル歩いた。」と、ニューハンプシャーの親戚への手紙で記している^[36]。冬の旅行はひととき困難だった。寒さと氷とが立ちはだかったし、集団で150マイルを移動するのに適した道路は、ウィスコンシン州グリーンベイとキウィノーとの間には存在しなかったからである。

ロビンソンは、1864年、グリーンベイからハンコックまで、郵便物を運ぶ契約を得た。彼は、不便さや損害を取り除き、定期的に快適な運輸手段を整備することを決意した。「われわれの人口は急速に増加しており、事業による利益はここに相当な旅客の交通を獲得している。それがこの地域の他のすべての発展とともに成長することを疑う余地はない」^[37]。駅馬車が設けられ、その役割を果たした。ハンコックから、普通の駅馬車はすぐに半島の先端やオントナゴンへと走った。

一時、シェルデンとダグラスは、小さな外輪船「プリンセス」を毎日運行して、カッパーハーバーからポーテッジエントリーまで郵便物と乗客を運んでいた。これは、川底が浚渫され、大きな船舶がスペリオール湖から直にポーテッジ湖へ入ってくることを可能にする以前のことであった。河口では、通常、2隻のスペリオール湖汽船が年間を通じて、毎日到着した。1860年のある春の日曜日には、5隻が現れた。ベンジャミン・ライトは、船舶による交通の始まりは「われわれすべてにより賢く感じさせ、より活発な一歩を踏み出させる。この地区のすべての人類は歓喜に酔っている。」と、宣言した^[38]。

古いキウィノー連水陸路の西端に建設された運河は、1859年に始まった動きのしめくりであった。それから、クインシー、フランクリン、ヒューロンを含む10社の鉱山会社は、ホートンのランサム・シェルデン・アンド・カンパニー社と共同で、キウィノー湾への出口となる運河の開削をおこなった。そうして、港からポーテッジ湖まで、長さ1,400フィート、幅100フィート、深さ12フィートの運河が開削された。それは、五大湖の「最重量級の船」を十分に受け入れることができるものだった。プロジェクトには5万5000ドルのコストがかかった。1860年5月17日、吃水81.5フィートのスクリュエ船、

「ジェネラル・テイラー」がホートンの船渠に入ってきたときには、多くの興奮と誇りが喚起された。汽船は1855年にはポーテッジ湖に入ってきていた。ホートンには、アイル・ロイヤル鉱山会社の埠頭と倉庫に加えて、2つの大きな埠頭と倉庫があった。それらの埠頭には、1861年のシーズン中に230隻の船が到着し、1862年7月には16日までに53隻の船が到着した^[39]。

ハンコックとホートンを結ぶ手段も徐々に改善された。1852年頃にこの地にやって来た「怒りっぽい年寄の英国人水夫」、サム・イールズ船長は公共の渡し船を運営していた。彼のヨール型帆船での30分の船旅に乗客が支払ったのは2シリングだった。もし乗客が一人しかいなかったら、彼は4シリングを支払うか、もう一人乗客が来るのを待つことになった。それは過大な困難ではなかった。イールズの家にある待合室は居心地良いもので、その代金さえ持っていれば、乗客は「ハーフ・アンド・ハーフ」や「トリプルXパイク」といった強い酒を飲むことができた。後に、ジョン・T・マーティンと彼のオランダ人の妻が渡し船を経営するようになった。1863年、乗客を求めていた多くの競合他社のうちの多くは、マーティンがすばらしい外輪汽船「ナイアガラ」を導入したのに感銘を受けることになった。それは、ホートンとハンコックの間を、乗客のみでなく、馬や馬車の一隊も運搬した。鉱山と町の繁栄と同様に交通量も増大したため、木製の有料橋が1870年に架けられた。やがてそれは、鉄製のものに架け替えられた^[40]。

1848年から1860年の間に、29社の銅鉱山会社がポーテッジ湖沿岸で稼働されていたが、うち7社はボストンに営業所があった。7社がピッツバーグ、7社がニューヨーク市、6社は2つの営業所をそれぞれフィラデルフィア、クリーブランド、デトロイトに持っていた。1社はイーグルハーバーに、1社はオントナゴン郡のロックランドに本部があった。

長い間、スペリオール湖岸の銅鉱石は、船でスーセントマリーへ送られ、陸揚げされて連水陸路を横切る1マイルを馬車で運び、そしてまた五大湖の南部を船でエリー運河まで運送され、そこから海岸まで東へ向かった。あるいは、船でオハイオ州へと向かい、運河とオハイオ川を経由してピッツバーグへと送られていた。1848年に銅を大西洋岸の都市にまで配送する際のコストはトンあたり約15ドルだった。1845年には、銅を積んだ船が初めてクリフ鉱山からスーセントマリーとニューヨーク州バッファローを経由してボストンへと送られた。1850年代のクリフ鉱山では、銅鉱石は粉碎され、樽に詰められて東部へ送られた。そして、残余は地元の搗鉱所へ送られ、一日あたり約25トンの鉱石が搗鉱された。1851年9月頃、クリフ鉱山総代理人ジョン・センターは、スクリュエ船ナポレオンに「kiln (炉)」と印を付けた9バレル

の銅鉱石の荷や、ノースウェスト鉱山で産出された 261～3,360 ポンドの重さの 16 箇の自然銅を載せ、スーセントマリー経由で、デトロイトの製錬所へ送っている^[41]。このような輸送方法は、この頃の船積み輸送のあり方の典型であった。

輸送の問題は、鉱業で利益を得る上での大きな課題であった。1852 年、キウィノー半島南部の銅と鉄に関心をもっていた東部の資本家たちは、大型船の通行が可能な運河をスーセントマリーに建設するために、かつてミシガン州議会が獲得に失敗していた 75 万エーカーの公有地を専有することに成功した。1855 年の春に竣工した運河は、アッパー半島の新時代を開くこととなった^[42]。

5. 南北戦争とキウィノー半島

合衆国政府への反抗者らが、サウスカロライナ州チャールストンのサムター要塞を砲撃した 2 週間後、そのニュースは、カッパーハーバーにも届いた。フォスターは、1862 年、「時が来れば、マスカット銃を背負う用意はできている。」と義理の兄弟に宛てて書いてはいるが、1863 年 10 月に、彼には戦争の遂行に不可欠な産業を指揮する必要がある、ということを経由として 50 ドルを支払って、兵役を免除された。このとき、フォスターを含む 13 人の鉱山支配人が、彼の兵役免除に賛成した^[43]。

戦闘の間からは遠く隔たっていたが、キウィノーにも戦争の大きな影響が及んだ。物価は戦前段階の 2 倍から 3 倍へ上昇した。南北戦争は、銅の需要を生み、その価格は 1865 年までにポンドあたり 17 セントから 50 セントにまで上昇した^[44]。一方、多くの若者が軍隊に召集されるか、募兵を忌避するためにカナダへ移住するなどしたため、鉱山は最適な労働者の多くを失うこととなった。1864 年後半の時点では、オントナゴン周辺の諸鉱山には通常の半分の労働力しかなかった。クリフ鉱山の労働力は、開戦時の 4 分の 1 にまで減っていた^[45]。それにとまって、労働者の賃金は上昇した。クインシー鉱山では、1862 年には坑夫の平均賃金は月に 41.23 ドルだったが、1864 年には 65.45 ドルへと上昇した^[46]。

ロビンソンは、当時のミシガン州知事、オースティン・ブレアに宛てて兵士の徴募に反対する書状を書いた。彼はそこで、「ホートン郡は志願兵の割り当て以上を供給してきたし、資金も惜しまずに出してきた。この地区は 18 年間苦闘してきた、今は 2,000 人も坑夫が不足している。さらに、労働者の 10 人のうち 9 人は外国で生まれた者であり、募兵を恐れて敵意を表明し、募兵を巧みに回避する『逃走(stampede)』に加わろうとしている。労働力不足は、銅鉱山を深刻に無力化するものである。合法的な代役を可能にする取り決めが、募兵を現実的なものにするだろう」と述べている^[47]。

キウィノー半島からは、およそ 833 人が戦争に参加していた(460 名がホートン郡、119 名がキウィノー郡、254 名がオントナゴン郡から)。志願兵のうち、オントナゴン郡からの 38 名、キウィノー郡からの 9 名、ホートン郡からの 58 名が戦死した。アッパー半島出身の 65 名の将校のうち、31 名はハンコック、ホートン、オントナゴン、カッパーハーバー、イーグルハーバーの出身であった。ほとんどが少尉か中尉であったが、数名は大尉、少佐、あるいは大佐にまで昇進した。キウィノー郡の入隊者名簿に記載された全 1,157 名のうち、アフリカ系が 2 名あった。兵士の徴募はコーンウォール人、アイルランド人、フランス系カナダ人へも及んだが、オントナゴン郡では、ほぼ 100%の志願兵がドイツ出身者であった^[48]。

1861 年 2 月初め、フォスターは、戦争が近づきつつある時期にフランクリン鉱山で暴動を起こすという、「わが鉱業地域の全住民の異質な部分」を悲観的に見ていた。坑夫、鉱石運び、荷車ひき、その他の者たちが、賃金の向上を求めてストライキを起こし、すべての地表の労働者にも操業を停止するように強いたのであった。クリフ鉱山の労働者たちは、前の日曜日にストライキをしていた。フォスターは、「もしも経営側が要求に応えれば、労働者たちはまた要求を重ねるだろう」と記している。彼とその同僚らは毅然とした姿勢を貫いた。そして、ストライキは一週間で終わった^[49]。

南北戦争は、北欧系移民をミシガン州へもたらす役割をも果たした。労働者不足に苦慮した鉱山会社は共同で 9 万ドルを工面し、代理人をノルウェーやスウェーデンへ派遣して労働者の調達を図った^[50]。クインシー鉱山会社は、1864 年、熟練労働者を募集するために、役員の一人名であったクリスチャン・タフテスをノルウェー北部へ派遣した。トルネ河谷(現フィンランド・ラップビ県、当時はスウェーデン王国領)の出身で、フィンランド語とスウェーデン語の双方を流暢に操ることができたタフテスは、この仕事にはとりわけふさわしい人物であった。同年夏、タフテスに連れられた 100 名以上の熟練労働者たちがハンコックに到着した。彼らのほとんどは、カーフィヨルドのアルテン銅鉱山からきたノルウェー人坑夫だった。それらに交じって数名のフィンランド人とスウェーデン人がいた^[51]。

タフテスのノルウェー来訪による刺激に加え、すでにアメリカへ渡っていた者からの手紙が到来して、恵まれた就業機会、住宅地入手の可能性、十分な食料や生活必需品の供給について伝えられると、ヨーロッパの北辺でかろうじて暮らしていたフィンランド人たちの間に渡米熱が高まった。

1865 年 5 月、クインシー鉱山をめざした船がトロンハイム(ノルウェー)を出航した。この中には 30 名のフィンランド人が含まれていた。一行はケベック(カナダ)でボ

ートに乗り換え、クインシー鉱山のあるハンコックへ向かった。上陸した彼らを出迎えたのはノルウェー人たちで、その晩、一行はノルウェー人の下宿屋に宿泊した。一行中のペター・クリストファーという者が、カーフィヨルドのイギリス人鉱山技師の紹介状を携えており、その技師と鉱業技術学校の同窓であったというクインシー鉱山の鉱山監督のとりはからいで、全員が仕事を得ることができ、スウェーデン人街の小さな丸太造りの建物を住居とすることができた。その夏には、さらに数名のフィンランド人がカーフィヨルドから到着し、この年の終わりまでには、ハンコックに居住するフィンランド人は50名を数えた^[52]。

公的な統計では、数字がやや低めに見積もられているが、ハンコックにおけるフィンランドからの移民の総計は、1870年代には500人、1880年代には2,700人と大きく増加している。しかし、南北戦争後のキウイノー半島には、もはや労働力は十分にあった。好条件で鉱山に就業することができず、周辺の未開地の開拓や遠隔地での就業を志して、ハンコックからさらに移転する者も少なくなかった。この後もこうした流入と拡散が繰り返された結果、ミシガン州には、他の州に比べて格段に多くのフィンランド系住民が居住するようになった。

6. むすびにかえて

本稿では、19世紀後期の五大湖沿岸地域においてどのように新たな地域が形成されたかについて、具体的な事実に基づいて明らかにするべく、ミシガン州北部キウイノー半島の銅鉱業地域を対象として、どのような人びとが集まり、どのようにコミュニティの建設がおこなわれたか、について検討してきた。

開発初期の鉱山地域には、当然のことながら鉱業関係者が多かったが、いずれの鉱山でも、コーンウォール出身のイギリス人、アイルランド人、ドイツ人の労働者が多数を占めた。イギリスやドイツは、ヨーロッパにおける鉱業技術の先進地域であったといえるが、とくにコーンウォール半島はイギリスの金属鉱業の一大中心地であり、もちろん英語を話すことができたため、コーンウォール出身者は、キウイノー半島に限らず、アメリカ合衆国内の鉱山では中心的な役割を果たした。鉱山開発が本格化すると、商業、運送や教育など、鉱業以外の生業に携わる人口が増加して、新たなコミュニティが形成されるようになった。同時代人から鉱業関係者へ向けられた目は、しばしば、その粗雑なふるまい、飲酒の習慣や不遜な態度に対する嫌悪が感じられるものであった。もっとも、本稿でとりあげた証言の多くが、合衆国東部出身の鉱山会社の支配人や教師などのものであったことを差し引いてみる必要はあるだろう。

東部出身者は精力的に働き、この地域の鉱業の発展に貢献し、陸路やこの地と東部の大西洋岸を結ぶ水運の整備にも重要な役割を果たした。そして、教会の創立に際しては、寄付や協力を惜しまず、新開地への伝統的な精神文化の移植にも努めた。新たなコミュニティの建設者としての自負は大きかったと思われる。

ドイツ出身の商人の例からは、彼らが血縁や地縁を頼って新大陸を訪れていたことがよくわかる。簿記等文書の取り扱いを担当した者以外は英語ができなかったことからみて、少なくとも彼らの初期の仕事は、ドイツ出身の坑夫相手の生活用品等の商売ではなかったかと推測される。また、イーグルリバーからハンコックへ移動した彼らの行動からは、繁栄する鉱山への移動を繰り返すという行為が、鉱業関係者のみに限らなかったことがよくわかる。

交通路の改善についてみれば、陸上交通路の整備もさることながら、五大湖を利用した水運の進展がこの地域の発展に大きく影響していた。とくに、キウイノー半島の中央部、ポーテッジ湖の西側に開削された運河は、その両岸に立地した町を大きく発展させることとなった。

南北戦争は、銅需要の増大、賃金の上昇などさまざまな形で、合衆国北辺のこの地域にも大きな影響を与えていた。少なからぬ外国人労働者が、あくまでもアメリカの内戦であったこの戦争に参加していたことは、地域形成の観点から、きわめて興味深い事実である。また、戦争に伴う労働力不足は、この地域への多数のフィンランド人移民流入の契機となっていた。さきにもみたように、当初は鉱山での労働経験のあるイギリスやドイツの出身者が移住者の多くを占めていたが、労働者不足は、鉱山会社の目を、低賃金で雇用できる鉱山労働者が豊富であった北欧地域へ向けさせた。イギリスやドイツ出身の労働者に比べると待遇が劣ったことや戦争が終結して労働力不足が解消されたことにより、早々に鉱山を離れたフィンランド人移民は少なくなく、鉱山周辺の未開発地に再移住し、農業や林業に従事するようになった者が増加したとも伝えられる。現在、ミシガン州は、アメリカ合衆国の中でもフィンランド系住民の多い州として知られている。彼らがどのような過程を経て、アメリカ国内へ広がっていったかということも、きわめて興味深いことであり、今後の課題としたい。

また、日本においても、西欧の鉱業技術を導入して鉱業の近代化が図られ、19世紀末頃に鉱業の一大画期を迎えた。日本では、それ以前から在来技術によって鉱山開発が進められており、鉱山周辺に相当程度の居住地が成立していたし、海外の技術は受け入れながらも、労働者が受け入れられることはほとんどなかったことなど、アメリカとの相違点は少なくないが、本研究で明らかにできたことを参考として、同時代における両地域の鉱業地域の展開を比較検討することも課題のひとつである。

注

- [1] 川崎 1992.
- [2] 原田 1998.
- [3] Turner 1994.
- [4] William H. Hathaway 1918. "County Organization in Michigan," Michigan History 2.
- [5] 前掲[3], p. 66.
- [6] Joseph W. V. Rawlings 1905. "Reminiscences," Keweenaw Historical Society Collection, Michigan Technological University Archives, 自筆原稿.
- [7] 前掲[6].
- [8] Philip P. Mason ed. 1991. Copper Country Journal. Detroit: Wayne State University Press.
- [9] 前掲[3]. p. 68
- [10] Joseph Austrian "Autobiographical and Historical Sketches," Michigan Technological University Archives, タイプ打ち原稿.
- [11] John H. Forster 1886. "Lake Superior Country," Michigan Pioneer Collections 8.
- [12] 前掲[11].
- [13] 前掲[11].
- [14] 前掲[11].
- [15] Michigan Gazetteer, 1863-64.
- [16] フレデリック・バラガは、スロベニア出身、1830年に北アメリカへ渡り、オハイオ州やミシガン州を中心に、移民やネイティブアメリカンへの宣教活動に従事した人物で、鉱山開発ラッシュの時代のミシガン州各地に足跡を残している(前掲[3], pp. 59-62).
- [17] 前掲[15].
- [18] Moritz Wagner and Carl Scherzer 1857. Reizen in Nordamerika in den Jahren 1852 und 1853. Leipzig: Arnoldische Buchhandlung. Keweenaw Historical Society Collection, Michigan Technological University Archives, タイプ打ち翻訳原稿.
- [19] Larry D. Lankton and Charles K. Hyde 1982. Old Reliable: An illustrated History of the Quincy Mining Company. Hancock Mi: Quincy Mine Hoist Association.
- [20] Samuel s. Robinson. Calender to the Letterbooks. Michigan Historical Collections Bentley Historical Library, Ann Avor.
- [21] Samuel s. Robinson. Estimate of Supplies Needed for 1866. Michigan Historical Collections Bentley Historical Library, Ann Avor.
- [22] 前掲[20].
- [23] Haeussler(2014). 及び Gordon Barkell, ed. 1963. Hancock, Michigan Centennial. Hancock, Mi: Hancock Centennial Committee.
- [24] 前掲[3]. p. 75-76
- [25] 前掲[10].
- [26] Houghton, Mi, 1961. Houghton Centennial Souvenir History and Program.
- [27] 1860年5月18日付, A. j. Wright 宛て Benjamin Wright の手紙. Michigan Historical Collection, Bentley Historical Library, Ann Arvor.
- [28] 前掲[26].
- [29] 前掲[26].
- [30] 前掲[11].
- [31] 前掲[15].
- [32] 前掲[15].
- [33] 前掲[26].
- [34] ネイティブアメリカンに用いられていた, 革製の靴.
- [35] 前掲[11].
- [36] 1864年1月1日付, Franklin Norton 宛て Samuel Robinson の手紙. Michigan Historical Collection, Bentley Historical Library, Ann Arvor.
- [37] 1864年6月8日付, Samuel Robinson の広告文. Michigan Historical Collection, Bentley Historical Library, Ann Arvor.
- [38] 1860年5月18日付, A. J. Wright 宛て Benjamin Wright の手紙. Michigan Historical Collection, Bentley Historical Library, Ann Arvor.
- [39] 前掲[15].
- [40] James Edwards. "How We Crossed Portage Lake Before and after 1875," Keweenaw Historical Society Collection, Michigan Technological University Archives, タイプ打ち原稿.
- [41] 前掲[15].
- [42] 前掲[6].
- [43] 1862年8月17日付, Colonel John Harris 宛て J. H. Forster の手紙. Michigan Historical Collection, Bentley Historical Library, Ann Arvor.
- [44] 前掲[3], p. 83.
- [45] Holmio 1897, p. 77.
- [46] 前掲[3], p. 83.
- [47] Samuel s. Robinson. Letterbook. Michigan Historical Collections Bentley Historical Library, Ann Avor.
- [48] History Upper Peninsula
- [49] 1861年2月4日付, Charles Emery 宛て J. H. Forster の手紙. Michigan Historical Collection, Bentley Historical Library, Ann Arvor.
- [50] 前掲[3], p. 83.
- [51] 前掲[45], p. 77.
- [52] 前掲[45], p. 78.

主要参考文献

- 川崎 茂 1992. 『鉱山業フロンティアの諸相—環太平洋地域論—』大明堂.
- 原田洋一郎 1998. "カッパーカントリー"の歴史と景観—アメリカ合衆国ミシガン州北部における銅鉱業地域の形成—, 東京都立航空工業高専研究紀要, 35, pp. 145-154.
- Haeussler J. S. 2014. Hancock. Charleston: Arcadia Publishing.
- Holmio A K. E. 1897. History of Finns in Michigan. Translated by Ellen M. Rynnanen 2001. Detroit: Wayne State University Press.
- Lynch M. 2004. Mining in World History. London: Reaktion Books.
- Thurner A W. 1994. Strangers and Sojourners: A History of Michigan's Keweenaw Peninsula. Detroit: Wayne State University Press.